

## 伊勢の蔵書家——伊勢商人竹口家の人々とその蔵書——

### 一 蔵書家の役割

我が国近世後期における時の学問や文芸、思想その他様々な知識や情報は、主に書物(板本)という物理的な媒体を介して受容され、大衆化されるに至った。従って、近世社会における書物の集積は、それ自体が注目すべき現象であることはいうまでもない。蔵書構成や所蔵率の分析は、その時代における学芸享受の内実をうかがう手だてとなり、時代状況のなかで機能した学芸実態へのアプローチを可能にする。また一方では、一定の集積をみた蔵書群が新たな契機となって、蔵書家個人からその周辺へと、さらに文化

的・社会的機能を広げて行ったという事実も見過ごされてはならない。即ち蔵書家は、知識や情報を受容すると同時に、その伝播の役割を担う存在でもあった。

近世後期における蔵書家は、知識人と言い換えても差し支えないであろう。ただし、その知識人には大きくわけて二つのタイプが見られる。一方は、書物により多様な知識や情報を獲得はするが、それよりも著述・編集等、知識や情報の生産者或いは「発信者」としての側面が顕著な知識人である。他方は、時に著述等をなすことはあったとしても、主に読者として書物により知識や情報を受け取る享受者、或いは「受信者」としての知識人である。これまで文学史研究や、思想史研究の主な対象とされてきた著名な作

高倉 一紀

家・思想家等の大方が、前者に属すことは言うまでもない。それに対して後者は、小粒ではあるがその数は多く、近世後期の地域社会において彼らの行動や影響力は、既に無視することができないほどのものとなっていた。

また、「受信者」としての知識人は、受信者であると同時に二つの意味において中継者としての役割をも担っていた。その一つは、彼らの多くが地域における富裕な名望家、或いは指導者であった事と関わる。つまり、「受信者」としての知識人が、蔵書を介して「発信者」より受け取り、咀嚼した知識や情報は、彼らによってより日常的で、具体的な言葉に焼き直されて近傍の人々に伝えられたことである。このプロセスは学芸等の歴史的・実態的理解を問題とする時、決して見過ごされてはならない観点となろう。いま一つは、その邸内の文庫等にプールされた書物が、多分に好事家的・愛書家的傾向を持つ同レベルの知識人や、学芸の師にあたる「発信者」的知識人へも、貸出という形で盛んに提供されたことである。この事実も、学芸の大衆化のみならず、蔵書家の営みが再び知的生産の場にフィードバックされていたことを意味する。実は「発信者」としても、門人・パトロン・知己等としてその周辺にあった蔵書家は、資料提供者として決して軽んずることのできない存在であった。さらに、この貸出という行為は、同好・同

学の枠を超えて地域社会全体へと拡大され、公開文庫の出現へとつながって行く。少なくとも近世後期の伊勢国を見る限り、射和文庫<sup>1</sup>に代表されるような不特定多数への資料提供の場は、「受信者」における書物集積の延長線上に実現したと見るべきであろう。

以上、本論に先立って、「受信者」としての知識人と、そこに集積された書物の研究的意義につき若干の私見を述べた。本稿においては、かかる視点から伊勢国中万の商家竹口家に着目して、近世後期の蔵書家における学芸享受のありかたを検討する。

## 二 直兄と直彦

近世伊勢国出身で、江戸を中心として三都に店を構えた豪商を伊勢商人という。彼らは種々の「長者番付」の常連であり、その店は『江戸名所図絵』の挿絵や、錦絵にも描かれるほどの繁華を誇った。

竹口家も伊勢の中万<sup>2</sup>（現三重県松阪市中万町）を本拠として、江戸に多数の本店を構えた典型的な伊勢商人である。中万は寛永十二年（一六三五）以来、江戸時代を通じて津藩領豊原組に属す。江戸店持ちとしての当家は、寛文五年（一六六五）に没した三代目当主作兵衛義直の日本橋進出に

はじまる。そして、延享二年（一七四五）五代目松方としもの頃、その後の江戸店の中心となる伊勢屋を南茅場町に開業、米その他の農産物を広く商った。さらに、六代目信因は寛政二年（一七九〇）に油仲買の株をも取得し、当家はこの時期既に商家としての確固たる地位を築き上げていた。かかる商い隆昌の機運は、七代目当主喜左衛門直兄さぶの前半生において頂点に達したのである。文化二年（一八〇五）直兄が深川佐賀町に開いた味噌店は、間もなく「乳熊味噌」の名で江戸の評判となり、『江戸買物独案内』（文化七年序）にも紹介された。また、この時期伊勢屋は南部八戸にも出店して、文政三年（一八二〇）頃まで営業している。

繁盛する商売の一方、竹口家と松阪の鈴屋との関係も直兄によりその端緒が開かれた。本居宣長の『授業門人姓名録』追加本「享和元年辛酉」の条には、

六月 中万村 竹口喜左エ門 政常

とある。ここに見える「竹口喜左エ門政常」が即ち竹口直兄であり、彼の名が「政常」から「直兄」にかわるのは、その鈴屋入門直後のことであった。

ともあれ、直兄の正確な入門年月日は享和元年（一八〇二）六月二十日（五）、本居宣長が他界するわずか三ヶ月前のことである。彼が生前の宣長と師弟関係を結び得た期間は、あまりにも短かったといわざるを得ない。しかし、学統継

承者の本居大平は、直兄を宣長没後も連絡を絶やさず、研鑽に努める斯学の同朋と認め、両者の関係は時を経ると共により密接なものとなっていった。即ち直兄にとつての国学の師は、実質的には宣長の著作と大平であったといつて然るべきであろう。実際の太平・直兄の交わりは、大平による歌の添削指導が中心であったことはいうまでもない。しかしその一方で、両者においては頻繁に書物の貸借が行われていたことを、直兄宛大平書簡等の現存する竹口家文書が証明する。

竹口家における国学享受を検討する際、直兄のほかにも一人「喜兵衛直彦」を忘れることはできない。直彦は直兄の弟であるが、鈴屋学への関心は兄のそれより更に積極的なものを感じさせる。東京大学国文学研究室（本居文庫）所蔵の「藤垣内門人姓名録」稿本によると、直彦は文化四年一月十四日に本居大平に入門。また、本居春庭の門人でもあった。号は「桃門「モモノカド」」。特筆すべきは、大平が半生をかけて編纂した古風和歌のアンソロジー『八十浦之玉』（三巻六冊）の下巻後編（雑部）に、直彦の長歌二首が採録されたことである。長歌の多い下巻雑部でも、入集長歌二首の例は極めて珍しい。ほかにも、彼は太平が松阪新座町の自宅、藤垣内に主宰した五日会の常連であり、兄の直兄は勿論、射和の竹川・富山、下蛸路の堀口等近隣参

会者への触役でもあった。まとまった著作としては、「歌集」と題する自筆稿本二巻二冊が残る。文化三〇同十年頃にかけての自詠三百六十余首、別筆の添削や評語も書き入れられている。また、『万葉集』への関心は特に高かったものと見え、自ら転写した『万葉代匠記』に極めて詳細な書入を残すほか、万葉詞句の注・訓読等を記した半紙や切紙なども多数確認される。

ところで、後に大平は紀州侯の命により和歌山城下に移住することとなるが、その転出準備に慌ただしい文化六年の六月、直彦を訪れて

紀の国にいでた、むとするころ直彦主の家にとぶ  
らひ来てやどりてあしたによめる

桃の門も、里千里へだつとも君わすれずば又もとひこむ

の一首を竹口家に残した。これに対する直彦の返歌は、前掲の「歌集」巻之一に三首が収載されている。

へだつとも又もこむとふみ言をし客のうら浪かけてし  
ぬばむ

も、ちさとへだて、も又こむといひしけふのみ言を君  
なわすれそ

わすれめや百山千山あま雲のたちへだつとも君のみ言  
を

十分に推敲されたものとはいいがたいが、事実彼は急逝する文化十一年まで和歌山への音信を絶やすことなく、書物の貸借も兄の直兄同様累次にわたった。

### 三 蔵書構成と竹口家の教養——学芸享受の実態

竹口家本宅の東蔵二階には、現在も儉鈍蓋の桐製本箱大小二十五箱が並び、近世末期の原排列を留める浩瀚な和装本蔵書類がそこに収納されている。筆者はかつてこの蔵書群等の目録作成<sup>2)</sup>に関わると共に、近世竹口家の蔵書構成とその所蔵率の分析を試みた。同家には幸いなことに、現在も嘉永四年(一八五二)と明治十四年(一八八一)に作成された二種の書籍目録<sup>3)</sup>が残存する。これに新たに作成した現存書の目録を加えると、近世末期から現在に至るまでの竹口家蔵書の増減と変化の様子がかなり正確に捉えられる。

そこで、まずは近世末期における竹口家の学芸享受の実態を嘉永四年の「書籍目録」に見ておきたい。この目録を同期における竹口家の教養源の総体とすると、そこに見られる蔵書構成は同家の教養を映し出す鏡であり、個々の書物は何らかの形で同家に影響を与えた学芸の内容といえるであろう。前掲「書籍目録」を通覧して、最も集中傾向の著しい類書群を主題別に掲げると次のようになる。(一)

内は所蔵率、へ内はタイトル数。

① 日常倫理 (二四・六%)

石門心学 (五三)、教訓・通俗道德 (四一)

② 仏教 (二三・四%)

仏教一般 (一八)、天台 (二)、浄土教・浄土宗 (二一)、

真宗 (五)、禅宗 (二五)、日蓮宗 (二)

③ 諸芸・娯楽 (八・九%)

書画 (七)、俳諧・狂歌 (二二)、囲碁・将棋 (三)、近

世小説 (二二)

④ 国学 (一六・八%)

神学 (一)、歴史 (二)、語学・音韻 (二二)、文学・和

歌 (二二)

⑤ 漢学・漢詩文 (五・八%)

経書・諸子哲学 (二)、日本漢詩文 (二五)、漢詩文

(五)

⑤ 兵法・戦記 (五・八%)

兵法・軍学 (一九)、戦記 (三)

こうしてみると、近世末期の竹口家蔵書の中でもタイトル数九四、所蔵率二四・六パーセントと、群を抜いて高い集中傾向を見せるのが、「日常倫理」の主題に包摂される類書である。他の類書群のタイトル数は、この内の一項目である石門心学のそれにも及ばない。これ程高い所蔵率を

占める日常倫理の類書が、直兄・直彦前後における竹口家のライフスタイルと無関係であったとは考えられない。

日常倫理には及ばないものの、タイトル数五一、所蔵率一三・四パーセントで、第二の類書群を構成するのが「仏教」である。それは竹口家における信仰生活は勿論、その処世教学としても一方の柱となるものであった。同家の旦那寺心光寺は浄土宗知恩院派に属す。ところが、前掲の「仏教」宗派別タイトル数を見ると、「禅宗」に分類された書物が最も多く、「浄土教・浄土宗」はわずかにこれを下回っている。竹口家における仏教への関心は、禅宗、浄土宗を核としながらも、特に宗派にこだわらない「仏教一般」に対するものであったと見るべきであろう。ところで、竹口家のなかでも最も仏教に傾注したのが直兄である。彼の「日記」(文化十一甲戌十月至同霜月廿八日)霜月七日の条には、

一 同夜竹斎、子敬、手前申談、芝山其明先生をむかへ般若心経講釈聞、手前当番、聴衆七郎兵衛も来<sup>⑩</sup>

とあり、江戸において同郷の鈴屋同門竹川政信等と申し合わせて、仏者芝山其明の『般若心経』講釈を聞いた由が記されている。この後直兄は、さらに積極的な其明の後援者となった。即ち、其明の著書『般若心経六悪六度略解』の板行に際して、その板下書・彫板等の手間賃十三兩二朱六

百八十四匁を引き受けたのである。そうした経緯によるものであろう、「書籍目録」には「般若心経六悪六度略解草稿」と同書自筆稿本とおぼしき記載が見え、現在も十冊の板本が竹口家には残されている。

第三の類書群を形成するものが、タイトル数三十四、所蔵率八・九パーセントの「諸芸・娯楽」である。この主題の諸書は、当時の富商に概ね共通するものであろうが、竹口家においては俳諧・狂歌と近世小説が共に十二タイトルと最も多い。それにしても、これらの文芸にことに熱を入れたという程の数とも思えない。おそらく当家における文芸的な嗜好は、次に見る国学がこれに代わり、より古典的・高踏的な傾向をもつものとなったといえよう。

第四の類書群「国学」のタイトル数は二十六、所蔵率は六・八パーセント。全体としては、その大部分が本居宣長及び鈴屋社中の著作である。例外といえるものは、賀茂真淵、重藤匹竜、富士谷御杖、加藤千蔭等で、平田篤胤その他気吹舎社中の国学書は全く見られない。さらにその各項目を見ると、「神学」に該当するものはわずかに二点、宣長の『玉くしげ』と『大祓詞後釈』のみ。但し、後者は大祓詞を対象とするとはいえず、その国語学的研究であり、内容的には「語学」への分類も可能であろう。「歴史」に分類されるものは、『かさねのいろあひ』の一点のみとこれ

も少ない。同書は真淵の著した故実書である。こうした項目に対し、「語学・音韻」「文学・和歌」はあわせて二十三点と、所蔵国学書の大方がこの二項目に集中する。竹口家の国学類書群の構成には、このような特徴が読み取れるのであり、それは同家における国学享受の実態を示すものともいえるであろう。

「国学」にわずかに劣り、第五の類書群を構成するものが「漢学・漢詩文」と「兵法・戦記」である。共にタイトル数二十二、所蔵率五・八パーセント。「漢学・漢詩文」の内容は、大部分が日本漢文等の漢詩文で、経書の類は極めて少ない。とはいえ、蔵書全体に占める漢籍の割合は決して小さくはなく、国学書と拮抗、並存する。また「兵法・戦記」については、この種の書物が商家の蔵書としてこれ程の割合になることは珍しい。その理由として考えられるのは、竹口家の家訓と関わる特殊な事情である。現在も同家には、「竹口家訓準繩録」なる書が伝えられているが、その序には次のように記されている。

予は一文不知にして其器にあらず、父の教〔誠〕に従ひ、軍の陣営図に倣ひ、一陣は五手に備へ、一陣を廿五にわかち、表裏八段となして日々の用脚をもふく、願わくは守り万分の一より積、遂に成なさしめんことを

兵書の陣営図にならない「表」（店方）と、「裏」（内方）とが一体となった堅実な経営方針を説く異色の家訓である。作者は第一丁裏に「安永八年亥三月 竹口信因誌」と見えるが、実際には信因（六代当主）のみならず、松方（五代当主・直兄（七代当主）の歴代もその作成に深く関与した<sup>13</sup>。彼ら当主には、家訓の作成にあたって、当然兵法等に関する基礎的な知識が要求されたはずであり、当該類書の集中にはかかる当家独自の事情が窺われる。また蔵書全体を見渡すとき、この類書群中に宝永元年（二七〇四）書写の『兵法問答三疑破』その他、比較的古い写本類が多く見られる。これも家訓の作成が、早く松方・信因の代より始まったことによるのであろう。

### 結語にかえて——竹口家の国学

以上、近世後期における竹口家の人々を素描し、嘉永四年の「書籍目録」により同家蔵書群の分析を試みた。知識人として竹口家を代表する直兄・直彦兄弟の行状を窺うとき、その人物像は謹厚な鈴門としての印象が強い。両者への国学の影響は、決して小さくはなかったであろう。ともあれ蔵書分析の結果は、同家における国学受容の内実を垣間見せるものとなった。即ち「国学」類書の内容からは、

歌の実作を中心とする文芸、或いは古典的教養として直兄等はそれを受け入れたものと思われる。そして「語学・音韻」等への関心も、鈴屋流の擬古的な作歌活動に不可欠な素養としてのものであったといえるのではないか。その意味では、竹口家における国学への接近が、神学ないし古道論としての国学思想を指向するものでなかったことは明らかである。また、それは当該類書群中に平田派の関連書籍が全く見られないことも無関係ではあるまい。殊に直彦<sup>14</sup>などは、本居大平に平田篤胤との面会を勧められながら、遂に気吹舎の学問に関心を示すことはなかった。

さて、所蔵率から見ると、「国学」は当家の蔵書中になりの比重を占めるものの、第四の類書群である。「日常倫理」の主題の下にまとめた石門心学や教訓・通俗道徳とは比較にならず、「仏教」の類書群と比べてもおよそその半ばにしかな過ぎない。即ち竹口家における国学は、石門心学や仏教、漢学をはじめとする様々な思想や宗教を許容し、決してその排除・限定の方向へと向かわせるものではなかった。むしろ国学以前に、直兄等竹口家の人々の日常的な倫理観や処世教学の核としては、石門心学、仏教、及び兵書の影響を受けた家訓等があったと見るべきであろう。この基礎の上に国学、中でも鈴屋学が受け入れられたのである。同時にそれは一見無秩序にも見える精神的雑居状況

の中で、穏やか且つ柔軟な「歌の学<sup>15</sup>び」として機能する、そんな国学であった。

## 注

(1) 「民学」の興隆をその理念として、竹川竹斎(政胖)が射和(三重県松阪市射和町)の私邸内に開設。安政元年(二八五四)の発足とされるが、実質的な公開文庫の活動は、嘉永元年(一八四八)には始まっていたものと思われる。

(2) 竹口家についての詳細は、高倉一紀ほか編『伊勢商人竹口家の研究』(和泉書院 一九九九)参照。

(3) 嘉永四年(二八五一)四月二十八日没、享年七十。号は黙浄・黙定、法号心誓祐観黙浄法子。

(4) 竹口直兄の鈴屋入門については、拙稿「竹口家の教養と国学——蔵書構成と所蔵率の分析から」(『伊勢商人竹口家の研究』第四章)に詳細を述べた。

(5) 本居宣長の「金銀入帳」辛酉六月二十日の条に、「一、金沓分 チウマ竹口喜左衛門入門」とある。

(6) 東京大学国文学研究室の本居文庫には、現在六種の「藤垣内門人姓名録」稿本(本居大平の門人録)が架蔵されている。この内の二種には、巻頭に「故翁門人姓名録之内大并春庭方音信不絶分」として旧宣長門人中の百三十

余名を列記。ここに記載された姓名は、旧鈴屋門総数の三〇パーセントにも満たないが、「竹口喜左衛門直兄」の名が確認できる。

(7) 高倉一紀・上野利三編「伊勢国飯野郡中万村竹口家資料目録」(一)～(五)(『松阪大学紀要』第十～第十四号 一九九二～一九六)として刊行。

(8) 二種の「書籍目録」それぞれの制作年については、拙稿「竹口家の教養と国学——蔵書構成と所蔵率の分析から」(『伊勢商人竹口家の研究』)に詳しく論じた。本稿では省略する。

(9) 上野利三・三ツ村健吉「竹口喜左衛門直兄日記 稿Ⅰ」(『松阪大学政経研究』第十卷第一号 平成四年三月)

(10) 中万隣村、射和の竹川東家六代目当主。江戸店持ちの豪商竹川家の一族で、南茅場町の江戸店(竹川彦太郎両替店)主人であった。松阪の鈴屋へも竹口直兄と同年に入門、次男の礼蔵は文政十二年(一八二九)直兄の養子となる。

(11) 竹口直兄抛出金の内、五両八分は竹川政信の施入。残りの紙代・摺手間・仕立賃等、九両三分九匁八分を鴻池義兵衛が引き受けた。竹口家の会計簿「ふところかがみ」による。

(12) 本居宣長が『うひ山ぶみ』にいうところの「神学」であり、「道の学問」とも言い換えられ、宣長学における神道学的領域に相当する。



(13) 天保五年(一八三四)、竹口家に止宿した沙門勇銳は  
同家において「竹口家訓準繩録序」を著述するが、そこ  
は

主人「直兄」以書語予謂ク、コノ書ハ吾祖父「松方」  
ノ夜話ヲ、其マ、愚父「信因」ノ書トメタルヲ、ヤフヤ  
クニ集メテ一冊トナセル拙作之卑巧ニシテ、微志之家訓  
ナリ

とある。

(14) 竹口家所蔵の「書簡」(「文化九年」八月三日 竹口直  
彦「宛」／本居大平)には、「○又平田半兵衛厚種マゴといふ  
人も御逢可被下候」とある。

(15) 『うひ山ぶみ』にいう「歌の学び」で、単純な歌学や  
文学ではない。それは「古の道」の核心とも言うべき  
「風雅ミヤビ」に直接至る手段(古風和歌)であり、またそこに  
至る必須の階梯(後世風和歌・中古物語)でもあった。

(皇學館大学教授)